

工藤光一さんを悼んで

岩崎 稔

同僚として、工藤光一さんと一番密接にお付き合いをさせていただいたのは、海外事情研究所をベースにして記憶と歴史に関するプロジェクトを立案し、精力的に研究活動を展開していた時期でした。それは、わたし自身にとっては、モーリス・アルブヴァックスの『記憶の社会的格子』に発する集合的記憶論の問題系を、自分の関心に沿ってぐっと広げようとしていた頃でしたから、歴史家との対話がことさらにスリリングに感じられた時期でもありました。工藤さんは「歴史学徒ならこの問題をどう考えるのですか」という問いにまっさきに答えてくださった方であり、わたしの身近にいるもっともありがたい対話相手のひとりでした。いまあらためて、その時期に取り交わした対話の成果でもあるシンポジウムの記録や論文を『クアドランテ』の各号を開いて読んでいます。工藤さん、楽しい日々でしたね。工藤さんは澁刺としていらっしゃり、そのいつも柔和で気遣いのある語りのスタイルによって、学識はもちろん、それにとどまらないものを数多く教えていただいたような気がしています。どちらかというと問題意識が先行し、論理を尖がらせて問い詰めがちな、ずいぶんと肌合いの違うわたしのような者を、工藤さんはときには持て余されていたのかもしれませんが、でもあのおりの楽しげな様子を思い出してみると、きっと工藤さんにとっても、ご迷惑なことばかりではなく、すこしは刺激的な発見と出会いだと考えてくだっていたのではないかと思います。

1999 年から三年間は、「近代国民国家形成における国民的＜記憶＞の総合的研究」というプロジェクトで科学研究費基盤（A）の助成金を獲得しましたね。共同研究のためにいくつかの部会を作るなかで、工藤さんは「ヨーロッパ部会」の中心になって活躍してくださいました。その活動のひとつが、2002 年の 3 月 16 日に開催した「ピエール・ノラ編『記憶の場』をどう読むか—日本語版の投げかけるもの」というシンポジウムでした。そのときの記録は、『クアドランテ』第五号の「特集」としてまとめられています。工藤さんご自身

もそのメンバーであった『記憶の場』日本語版翻訳チームの錚々たる歴史家のみなさんにお声掛けして東京外大にお呼びし、その方々のまえで、あらかじめこの本の持っている意味と問題点を掘り下げる公開の研究会をしようということになりました。外部からの提題者としてふたりで考えたのが、民衆史の安丸良夫さんと、おりから『客分と国民のあいだ—近代民衆の政治意識』を吉川弘文館から出したばかりの牧原憲男さんでした。わたしはその依頼の使者を工藤さんから仰せつかったのですが、ありがたいことにお二人が即座に快諾してくださり、しかもその勢いに巻き込まれてわたし自身が三人目の提題者に加わって、企画が成立しました。翻訳者を代表して谷川稔さんが基調的な報告をしてくださり、安丸さん、牧原さん、そしてわたしがコメントをしたあと、全体で討議をするという形です。当時、実は『記憶の場』の翻訳はまだゲラにもなっていない試訳段階だったのですが、日本語版の出版を引き受けていた岩波書店の協力も得て事前の仮綴じ原稿集を作って、それを提題者だけでなく、主要な参加予定者のあいだでも共有することで、実のある議論ができるように工夫したのでしたね。そうしたことを工藤さんは苦勞をいとわず進めてくださいました。結果として、非常に濃縮した議論が取り交わされる会議になりました。

わたしはノラの「記憶と歴史のはざまに」にある「歴史学が記憶殺しでもある」という指摘に強い印象を受けていました。不作法にも、その究極的ともいえる学問批判のテーゼを歴史学はどう受け止めるのかと、谷川先生にも工藤さんにも詰め寄ってみたことがありました。そのときの工藤さんが、半ば苦笑しつつ、しかし半ば真剣に、「思想史のアイロニーとしてはそういう言い方もわかるけれど、これを無骨に真に受けてしまうとそもそも歴史学という知の営みがなりたたなくなるよ。歴史学を志すものとして、そこは譲るわけにはいかないね」ときっぱりとお答えになりました。そのときのご様子やちょっとかすれたようなお声の独特のトーンを、昨日のここのように思い出しま

14 工藤光一さんを悼んで

す。

たくさんの参加者があり、活気ある議論を実現できたこのときの会議に味をしめて、工藤さん、わたしたちは『記憶の場』をめぐるもう一度大きなイベントを企画しましたね。工藤さんと話をし、いっそのこと編者のピエール・ノラ教授を東京外大に呼んじゃおうということになり、そこにやはり同僚で総合文化研究所の所長であったフランス文学者の西永良成さんが一枚噛んでくださり、日仏会館から追加予算を引き出してくださって、とんとん拍子に進んだ企画でした。今度はノラ氏が基調講演を引き受け、それに対する討論者として工藤さんご自身とともに、歴史家の成田龍一さん、社会言語学者のイ・ヨンスクさん、そしてわたしが向き合うという形にしました。同時通訳者として、当代一のフランス語の使い手である明治大学の三浦信孝さんをお願いをし、裏方での翻訳通訳者としては、いまは同志社大学の教員となっている哲学者の菊池恵介さんに手を貸していただきました。あれもいいチームでしたね。ところが、御高齢のノラ教授は、来日してしばらくすると発熱し、体調が芳しくない状態になりました。心配を紛らわすためにわたしたちは「無理させてアカデミー・フランセーズの会員を殺しちゃったら、国際問題になるかなあ」とブラックなジョークを飛ばしたりしていましたが、実際には会議当日まで気を揉み続け、多くの聴衆が集まる非常に大きなシンポジウムになることはすでに確実であったにもかかわらず、中止もやむなしと覚悟していたのですが、工藤さんを初めとするわたしたちの討論原稿を菊池さんが完璧なニュアンスを拾う素晴らしい翻訳でノラ教授のホテルに届けたところ、かれは俄然活力と戦闘心を取り戻し、絶対に受けて立ちたいとおっしゃるようになりました。結局、すべては杞憂に終わり、少し前まで高熱を出して寝ていた老人とは思えない様子でノラ氏は『記憶の場』をめぐる評価、批判、反批判が飛び交う空間の真ん中に立たれ、意義深い国際会議になりましたね。とくに『記憶の場』のなかには共和主義の排他性を批判する視点はあるものの、依然として女性と植民地主義のマイノリティーの問題が欠落しているのではないか、という問いかけに、ノラ氏自身がある程度はその欠落を認めつつ、ご自

分の所見を限界のあるものとして誠実に述べていたのは印象的でした。また、『記憶の場』がナショナルヒストリーの克服というよりも、いったんはそれを相対化しつつも、あらためて時代に即応した形で新しいナショナルヒストリーを作り上げることに終わっていないか、という本質的ともいえる批判に対して、ノラ教授はひるむことなく事業の意義を力説されていましたね。あの場に相応しい緊張感のある対話だったと思います。

工藤さん。あなたとは他にもいろんなことをいっしょにしましたね。工藤さんの最愛の師であり、わたしにとっては崇敬の対象であった二宮宏之先生が逝去されたあと、山之内先生と安丸良夫さんに、二宮史学について論じていただくワークショップをフェリス女学院大学の会議室で夜遅くまで続けたのは、あれはいつだったのでしょうか。あの夜も、成田龍一さんはもとより、フェリス女学院大学の中塚次郎先生を初めとする方々がたくさん集まってくださいました。工藤さんの帰幽の報に接して、胸は塞ぐのですが、それでも思い出するのはそうした活動のなかでのあなたの姿です。そうした記憶を大切に抱いて、歴史叙述と記憶の問題について、バトンを受け継ぐような気持ちでわたしは、これからも考え続けていくことにします。さようなら、工藤さん。

(いわさき　みのる・東京外国語大学総合国際学研究院)